

## 山の百名花 番外編

講師 佐藤 マチ子

## 【119】テガタチドリ

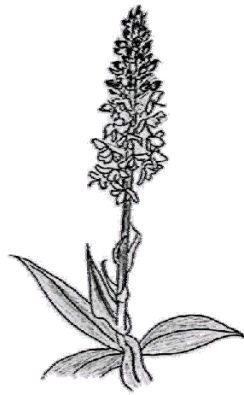
まだ高山植物の名もあり知らなかった頃、加賀白山の明るい草原でたぐさんのハクサンチドリに出会った。時折、やけにのつぽのものがあつて、さすが本場のハクサンチドリは立派だと感嘆したが、実はこれはテガタチドリでハクサンチドリとは別物だということの後日、知ることになった。

チドリ連はラン科の中でも、黄緑色の小さく地味なものが多い。チドリとは小さいとか、かわいいという陰の意味があるとか。上下左右に突き出した距、唇弁、萼片、側弁などからなる花の形を、千鳥、蜻蛉、鷺などの姿に見立てているのも、興味をそえられるものだ。なかでも、ハクサンチドリの仲間には、ニヨホウチドリ、ノビネチドリ、カモメラン、オノエランなど色や形もさまざままで夏の楽しみを増してくれる。

テガタチドリは、亜高山から高山の草原に生える多年草で、高さは 30 ～ 60 センチ、地下に白色で肉厚の手の形をした根を張るのでこの名を持つ。茎は直立して 5 ～ 6 枚

の葉が茎の下部に至生する。淡紅紫色の小花が密集した花穂をつける。

花は 1 センチほどで唇弁は三角形で三裂中裂弁がとがっている。ハクサンチドリは小形で唇弁は卵形の三角形で三裂弁がとがっている。



## 【120】ネバリノギラン

日本各地の亜高山帯の草地に生えるユリ科の多年草。根生葉は剣形の細いものが、二列に開いて長さは 10 ～ 20 センチ、巾は 1 センチほどでやや内側に曲がる黄緑色、その中心から短い花茎を出す。花茎には短い小葉が数枚至生し、6 ～ 8 月ごろ茎の先端に小さな黄色の花を穂状につける。花は下半分が筒状、上部は六片に分かれて開く。花の咲いている間中、花の穂全体に粘りが

ある。これが名前の由来だ。

一見よく似たノギランがある。ノギランは枝分かれする。ネバリノギランは一本立ち花もノギランは子房が全部平たく開き、ネバリノギランは子房が下位でつぼんだ感じで咲く。花の名山でもある秋田県の森吉山へ夏の初めに訪れた。森吉神社から森吉山山頂直下までの登山道は、イワイチヨウ、ニッコウキスゲ、ハクサンチドリ等にまじって黄褐色の地味な花であるネバリノギランがひときわ目立って見えた。モウセンゴケやムシトリスマレは生きる手段として粘りを持つが、ネバリノギランはなんの為のネバリなんだろうか。などと思わせる不思議さがある。

